
太安万侶《おおのやすまろ》古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病院の調査

春野一人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おのやすまろ

太安万侶古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病院の調査

【Nコード】

N5099Y

【作者名】

春野一人

【あらすじ】

古事記と日本書紀といった二つの歴史書が、同時に作成された。両書ともかなり似通った内容であるが、大きな違いもある。日本書紀に関しては、その後の官制歴史書である「続日本紀」に作成された記事が載せられているが、「古事記」については記載皆無である。「古事記」は巻頭に、太安万侶が、編者として、長々と文章を書いているので、それを本として、「

古事記」の作成が、日本書紀に十年ほど先立つことが知れるのみである。著名な酔いどれ詩人・田沼遼は入院ごとの歴史研究を出版し、

ちょっと人気を得ている。さて、今回のテーマは何か？

酔いどれ詩人、田沼遼へたぬまりようの入院

酔いどれ詩人、田沼 遼は、数年に一度体調を崩し、別荘行きと称して懇意な院長のいる、鎌倉海浜クリニックに入院するのが常なのだ。遼は詩のみでなく、洒脱な味わいのエッセイも書き、人気がある。読書好きの彼にしても病室では、いささか退屈である。このごろは、退屈ををまぎらわすのに彼は歴史の謎に取り組むことにしている。前回は邪馬台国のあった場所、前々回は織田信長の本能寺の変をテーマに取り上げて、「酔いどれ詩人・海浜リゾート病院研究所 その二・邪馬台国はどこにあったか？」と「酔いどれ詩人・海浜リゾート病院研究所 その一・織田信長はなぜやすやすと本能寺で殺されてしまったか？」ずっと以前には「酔いどれ詩人・海浜別荘病院研究所・日本は何故不利な戦争に突入してしまったか？」など、シリーズとして出版されている。

さて今回は、どうしようと田沼 遼は特別室の病室から見える、鎌倉材木座の青い海を眺め眺めていた。「酔いどれ詩人」などという通称は、実は彼自身が名乗っているので、田沼は実はかなりきまじめな人で、キリスト教系清滝女子大学で講師の職も担っているのである。講議はもちろん、日本文学である。

軽くドアがノックされた。どうぞという田沼の声で入ってきたのは、文華爛漫社の女子編集社員、田村先生担当の三十台始め独身の山辺沙也香やまのへさやかであった。甘いものが好きで日本酒も好きな彼女は、中背でやや肉がついた体型である。しかしながら和服を着せたら似合うだろうと思わせる、なかなかの目鼻立ちがととのった美人である。「先生、また入院だそうですね。先生、お口寂しいかと思ひまして、ノンアルコールビール・ダース持ってきましたよ」

「おいおい、その先生は辞めてくれよ。しかし、そのノンアルコールはいいね」

「でしょ？ 気に入っていただけてよかったです。・・・ところで、

センセ、今回はテーマは、決めておられます？」

「あのね、僕は何も、作品を書くために入院するのではないの。あくまでも僕の暇つぶしの結果を、君が録音から起こしてくれたただだからね。今回もそうとはいきませんよ」

「まあ！センセ意地悪じゃないですか」

「あは、そうかな。実は海浜リゾート病院シリーズはなかなか好評で、良い飲み代しろになっているんで、なにかないかなと考えてはいるんだ、なにか良いテーマはない？」

「そうですね、前作の邪馬台国はどこにあったかは、詩人らしい万葉集の知識もあつてユニークで、かなり評価が高かったですね。・

・出版の立場から見ると、邪馬台国論争はどうやら一段落したように思えますので、古代でも何か違うテーマがないですか」

ドアがノックされ、看護婦長の草野英子がコーヒーを二つトレイに載せて入ってきた。

「山辺さん、お久しぶりです。二年前田沼先生が入院されていた時いらいですね。先生しばらくの入院になりそうなので、又なにかとよろしくお願いいたします。なんだか、先生が体調を崩されたのが嬉しいみたいで恐縮ですが、先生はこの病院の事をエッセイで別荘と呼んでおられますから、病院全体が華やいだ気持になっているんですよ・・あ、コーヒーを入れてきました、お好きでしたよね・

・先生はコーヒーと日本酒とウイスキーにはうるさい人なんですけど、今はいくらなんでもお酒は当分だめなんで、特別に良い豆が手に入りましたので飲んでいただこうと、入れてきました」

詩人、テーマを決める

「あ、これはうまいね」一口すすって、ベッドに腰掛けている田沼は立っている婦長を見上げて言った。

「私ね、これと言った取り柄はないんですけど、コーヒーだけはこっているんですよ。気にいっていただいてうれしいです」

「お世辞じゃないよ。ホントにうまい。なにか秘訣があるのかな」

「良い水を使いますの。私、丹沢の山に近い厚木に住んでいるので、山からのわき水が手に入るんです。その水で普通にドリップで入れますと、安い豆でも見違えるようなコーヒーが作れるんです。でも、今日は豆も一番高いの使ってみました」

「イスラム教では酒を飲んではいけないんだよ。それでアラブの坊さんは、酒代わりにコーヒー・コーヒーなんだ。僕もしばらくはコーヒーが酒がわりだな」

「コーヒーならいつでもお申し付けください。すぐ用意しますからね。・・・ところで先生は、女子大で日本文学を教えているということですけど、日本書紀とか古事記なども教えておられるのですか」「5年まえからね、その大学教授が古くからの飲み友達でね、やってみないかと声をかけられたんだよ。日本書紀とか古事記は、ちよつと自分には縁遠かったんだがね、講師就任を機会に少し読み込んだよ」

「あら、そうなんですか。私、歴史が好きで閑だと「平家物語」とか、小説の「平将門」などを読む人なんです。・・・今、ひとつ疑問が私にはあるんですの。それで先生に聞いてみようかなと思ったわけなんです。いいかしら？」

「解ることなら答えますよ」

「日本書紀と古事記は似ているでしょ。聞くところによると同じ頃に作られたと言うことらしいのですが、同じようなものが、どうして二種類もあるのか私には解らないんです」

「そうだね。それは気がつかなかったな。それは変だね。不勉強で、その質問には答えられないな、ちよつと調べてみるよ」

横で聞いていた山辺沙也香の、眼が輝いた。そして言った。

「田沼先生、それいいですね。日本書紀と古事記には数々な謎があるんですね。その成立とか内容とか。どうです今度は「日本書紀の秘密」などというのは、いけるかも」

「ふむ、そうだね、日本書紀すら偽書ではないか、という人がいるからね。やってみようか。以前に書いた「邪馬台国はどこにあったか」でも日本書紀の記事を、しばしば検証したが『不思議な本だな』と、思ったことがあるからね。山辺さん、取りあえず古事記と日本書紀の原書と注釈本と現代語訳、それからパソコンを一台用意してくれるかな。あとは君の手伝いとパソコンで必要な本はおいおい手に入れることにしよう」

古事記の序文

古事記、日本書紀が届けられて一週間後、昼過ぎ沙也香は田沼の病室にやって来て言った。

「先生、なにか収穫ありました？」

「そうだね、その前に、僕が我流で訳した古事記序文を読んでみてるかな」

沙也香は、さしだされた原稿用紙に書かれた古事記序文に眼を通した。

古事記 序

臣の安麻呂は申し上げます。大昔、この世の根源が固まり始めても、いまだに定かな兆候を取ることがありませんでした。したがって名もなく動きもありません。だれにもその形を判断できない状態でありましたが、やがて天と地がはじめて分かれたれて、神々の誕生となりました。神の陰陽も天地のように分かれたれて二靈（イザナギの命・イザナミの命）は万物の祖先となりました。両神は陰の世界である幽界と陽の世界である現実との両方の世界を行き来して、太陽の神と月の神が眼を洗うにつけて現れ、海水に浮き沈みして身をあらうごとに多くの神々が現れました。この世の始めは暗くてはつきりしませんでしたが、神々の自らある智恵により国を生み、島を生み、再び神を生み、人を生んだことが解ります。天の岩屋戸に鏡を掛けた時から百の天皇が続き、剣でおろちを切って萬神が誕生したのであります。神々が安川原やすのかわらで合議をなされ、それゆえ天下は穏やかになり、出雲の浜で大国主の神に談判してからは、国はいよいよ平穏となりました。この時をもって二二ギの命が初めて高千穂に下り、神武天皇が秋津島を巡歴なされました。荒々しい神が熊に化けて現れるに及んで天から剣を得、尾のある人々が道に溢れて遮り

ましたが、大カラスが吉野への道を導きました。軍の者は舞い踊りながら敵を打ち合図の歌で賊を討ち取りました。崇神天皇は夢の中のお告げを聞いてオオモノ又シ神を祭られ、それ故に賢明な天皇と呼ばれました。仁徳天皇は民家の煙の立ち上るのを眺めて、心安らかになられましたから、今でも、聖帝と呼ばれております。成務天皇は国や県かほねの境を定められ允恭天皇は遠飛鳥いんぎよつに飛鳥とあつあすかの都を建てて、天下の氏や姓を正されました。このように天皇それぞれの方が行ったことは様々でありましたが、道を正すと言うことにおいて他ならないことでありました。

飛鳥清原あすかきよはらに大宮殿を建造なさつて、全国をお治めになりました天武天皇の御世の前頃になりますとやがて天武天皇になれる皇子は天子たる徳を持ちながらも、いわれがあつてお隠れになっていましたが、ついに雷鳴を轟かせる時がやって参りました。

古事記序文 二

けれども、天命がいまだ至らないので、蟬の抜け殻のように吉野の山に棲息なさりましたが、やがて時を得て伊勢の国に虎のように進まれ、その軍は瞬く間に山川を越え渡り、軍勢はあたかも鳴りやまぬ雷鳴のごとく雄壮でありました。猛士は煙のよう燃え立ち、赤旗は、兵を引き立て、凶徒は屋根の瓦のように崩れ落ちました。そして短時日のうちに敵軍は壊滅し、戦場の悪臭も妖気も、自然と消え澄み渡りました。それで戦役に用いた牛を放ち、馬を休め、心安らかに都に帰り、戦旗を巻き、戈（なぎなたの様な長刀）を納め、天下泰平の歌を歌い都に入られました。時は正に太歳星（木星）が酉の方角にある年の二月、清原の大宮殿にて即位なされました。その道は中国賢帝五帝の一人黄帝にまさり、徳は周王を越えておりました。天皇はしるしとして三種の神器を受けて、その威光は国の隅々まで行き渡りました。しかも天皇は海のように深い智慧をもって、遙かな古代の事を探り求められ、明晰な御心は先代の天皇の業績を見据えておられます。

ここに天皇が言われました。

「朕が聞くことには、『諸家が先祖から伝え持っている帝紀（天皇の系図）と本辞（出来事）は、すでに真実と違って多くの虚偽を加えている』ということである。それであるから、今の時を以て、その誤りを正さなければ、何年も経ぬうちに、その真実が失われるであろう。史実の真実を定めることは、国家行政の根本である。それ故、国史を定め、後の世に伝えようと思う」

時に、一人の舍人（官吏）がいました。姓は稗田、名は阿禮、年は二十八でした。人格は聡明で、書を読めば暗唱し、耳にはいる言葉は、すべて記憶しました。それで、阿禮に勅語して（命じて）天皇の系譜、出来事の数々を読み習わせました。しかしながら、諸々の事情が変遷し、いまだに史書をなすに至りませんでした。

臣がつつしんで思う事には、当代の元明^{げんめい}天皇は天地人の三つの徳に通じておられ、その威光は宇宙の隅々まで行き渡り、御殿におられたままで、その徳は馬のひずめの先、舟の舳先まで及んでおります。太陽は天に燦々と輝き、慶雲は空を彩り、二本の幹が一本に合体し、一つの茎から多数の穂がでるという、吉兆が次々に現れて、これを書き留める書記官の手を休める閑すらもないありさまでございます。又、異国からの貢ぎ物はうず高くたまり、倉の中が空になると言う月は一月もありません。

古事記序文 三

ここに、天皇は旧辞の誤っているのを惜しみ、和銅四年（註・西暦711年）九月十八日をもちて、臣安万侶に詔みことのりして、先の天皇が命じて稗田阿禮に音読させた旧辞を選録して献上せよとのことでありますから臣はお言葉のままに子細に採録いたしました。しかしながら上古の時は言葉は質朴でありまして文章化することはきわめて困難でありました。漢字の意を持ちて表記すれば、阿禮の表現するところと異なり、かといって、阿禮の発する音のみを連ねては、はなはだ意が通りません。

それでありますから、一句の中に、音と訓をまじえて用い、単語などはまったく漢字の訓を用いて表記したものもあります。その上で意味の取れない言葉は、注を用いて明らかにし、意味のとれるものは、ことさらに注をつけませんでした。姓の読み方については、日下という字を玖沙下くさかと読み、帯の字を多羅斯たらしと読みますが、このようなたぐいは、解ることありますから、特に注をつけませんでした。古事記の内容は天地開闢かいひやくより始め推古天皇の御世にて終わります。それ故、神代から神武天皇までの神々の代を上巻とし、神武天皇より応神天皇までを中巻とし、仁徳天皇より推古天皇までを下巻とし、あわせて三巻を採録して、慎んで献上いたします。臣安万侶、かしこみかしこみ、深々とひたすら頭をさげます。

和銅五年正月二十

八日 正五位上勲五等太朝臣安万侶

「どうかな、必ずしも原文とおりでないが、僕もへボ詩人ながらいやしくも詩人であるからには、雰囲気は伝えているつもりなんだがな」と、田沼は、沙也香が読み終わったようなので声をかけた。

「これならよく分かりますね。普通は現代語訳でも、よくわかりま

せんものね」

「古代の書物にしては珍しく、作者があつかましく出てきて、古事記の成立についてこと細かく説明しているね。天皇・皇子をさしおいて、正五位という、やっと宮殿に上がることができるというぐらいたいして位が上でない者が、このように官制の書物の巻頭に文を記載する事じたいが異常な事と思われるんだよ。ちなみに日本書紀編纂の責任者は皇子で第一位という高位の舍人親王^{とねり}なんだ。その舍人親王ですら、日本書紀に序文など書いていないのにおかしいのではないだろうか。まあ、日本書紀には序文とか後書きとかは一切ないのだから……。これは今で言えば、大会社の社史に平社員が序章を書いているような違和感を感じるんだがどうだろう」

「そつえば、そうですね」

病室の窓辺に秋の材木座の海が陽をうけて、きらきら輝いているのが見えている。二人は無口になって、その景色に見入った。

古事記の不思議 一

「いつ見ても、良い眺めですね」

「どうだ、そこまでちよつと出てみないか」

「あら、いいんですか」

「なに、大丈夫さ。僕の入院は単なる肝臓君の骨休めだからね」

「ま、都合のいい入院です」

「君ね、詩人を舐めてはいかんよ。普通、詩人は無法者で悪人なんだよ」

その時、ドアがノックされて、入って来たのは海浜病院の院長、大島五郎であった。

「田沼先生ご挨拶おくれました。ちよつと糖尿病の研究会があつたもので、三日ばかり留守にしました」

「いや、いいですよ。ひどく体調が悪いわけではないんです。これは内緒ですが、ちよつと詩人仲間との酒のつきあいなどが煩わしくてね。それから逃げるために入院を院長にお願いしようと電話したら、おられなかったのです。そしたら婦長さんがね快く受けてくれたんですよ」

「あはは、婦長は、裏で女院長などとよばれてるようですからね、私としては従っている方が楽なのですよ。それで良いのです。．．．ところで、今度のテーマはもうおきまりなんですか？」

「ええ、古事記と日本書紀の関係がなんだか非常に怪しいのです。太安万侶がどのように関わっているかもなんだかはつきりしません。これをすつきりとさせたいのですが、どうなりますか。どうせ暇つぶしの座興ですから良いのですが．．．」

「また、これを元に出版なされるんでしょう？本に登場するということで近頃はこの病院の特別室はだいぶ人気が出てまいりました。また、普通の患者さんも面白がっているようなんですよ」

「おや、良い話を聞いたぞ。今回は病院から宣伝係として給料がでそうだな」

「いや、それはかんべんしてください」

院長が自室に引き揚げたあと、田沼と沙也香は浜辺の散歩に出かけた。

十月の日没は早い。西に海を見る材木座海岸は鎌倉のはずれで、人影が少なかった。夕陽が雲と海を赤く染めている。田沼と沙也香は近くの、海辺のレストランに入り込んでコーヒーを注文した。

「たまには、こうして散歩でもして気晴ししないとね、良い発想も生まれてこないよ」

「この時間とても良いですね。先生がここが好きなのがわかりますわ」

「そうだろう。僕は海が好きでね。君も知っているように、先年妻を亡くしてから、子供もいない僕の生活は少し殺風景でね。海があつて暖かい人たちがいる海浜クリニクは居心地がいいんだよ。・

・朝に魚が水揚げされる小さな市場などは僕の詩興をかき立ててくれて最高なんだ。・・さて個人的なことはこのくらいにして、これからの進め方を話そうか」

「あら、ちよつと、先生を寂しがらせてしまったようですね。・・ごめんあさい」

「僕はね、日本書紀と古事記の神話時代はわりとくわしいんだが、雄略天皇以降はちよつと苦手なんだな。私が講師をしている清滝女子大学の国文科助教授に、まだ若い早川祐司君という人がいるんだけどね、先生にしては余り固くない人でね、いい加減な私と馬があうのだ。今日になって、その彼ならば、私の調査のいい相談相手になってくれると思いついたのだ」

「それなら、心強いですね」と、沙也香は言った。

古事記の不思議 二

レストランのコーヒーは濃厚で純良だった。良く磨かれたガラス戸の外は広めのテラスになっている。テラスの向こうの生け垣はサザンカで濃い緑色の葉の所々に真紅の花がいくつも花を咲かせている。その向こうに、海が見えている。

田沼はコーヒーに砂糖を入れてから、静かにかき回して生クリーム入れた。生クリームはコーヒーカップの中で、小さな渦となった。それを田村はしばらくじっと見つめた後、沙也香に眼を移して言った。

「古事記が作成されたことは、日本書紀にもその後の史書である続日本紀よくにほんぎにも書かれていないのだ。ところが、日本書紀が作成されたことは続日本紀にすっかり書かれているんだよ。古事記が作成された事情は、なんと、君がさっき読んだ、古事記の序文によってのみ知ることができるに過ぎないんだ。もしだよ、この古事記の序文を、古事記からはずしてしまうと、古事記は成立不明の謎の書になってしまうんだ。歴史の教科書には、古事記が成立した年代がしっかりと知り顔にかかっているが、その知識の出所は、みなこの序文であって、他の書物ではないのだ」

「そうということなんですか？」

「そう」

「なんか不思議ですね」

「古事記の後の史書である同じ官撰の日本書紀に無視されている古事記はどういう書であるかと不思議だ」

「それでいて、古事記序には、くどい位の古事記成立のいわれが書かれているというのは、なんていいいますか調和が取れていない感じですよね」

「そう、山辺さんの言うとおりさ。この変な序によって、古事記は偽書であるという説まであるくらいなんだ。その説を裏打ちするか

のように、江戸時代に入るまで古事記の存在は忘れられていたというのだ」

「意外ですね」

「そうだろう」

「そして古事記が献上されたのが712年で、日本書紀が献上されたのが720年で、ほぼ同時に二種の歴史書が完成しているのも不可解なんだな」

「そうですね」

田沼はポケットから手帳を取り出して言った。「ここに日本書紀が献上された事を続日本紀から書き写してある。ちよつとそれを読んでみよう。それはこうだよ。・・・先にこれ、一品いっぽんとねりしんのう舎人親王、天皇の命を受けて日本紀の編纂にあたっていたが、このたび完成し、紀三十巻と系図一卷を選上した。・・・これは続日本紀の養老四年の条、つまり720年の記事なんだ。ここで言う日本紀というのは日本書紀の本来の書名なんだ」

二人の会話が途絶えた。

古事記の巻頭文を詩人が訳す

翌日の午後図らずもうわさをしていた早川祐司君がひょっこり、田沼の病室にやって来た。

「田沼さん、またずる休みですか」

ソファで古事記と日本書紀の同じ神話のところを照らし合わせていた田沼は、その声に眼を上げると、笑顔の早川の顔が眼に入った。「オイオイ、死にそんな病人をとつかまえて、その言い方はないんでないの？」と、田沼は怒った顔をしてみせる。もちろん、それは冗談である。

「やたらに休講にすると、そのうち学校も首になるかな」

「いやいや、田沼さんは講師でも、言うなれば、学校のスターですからね、これが私なら首が危ないですけど、田沼さんはべつですよ」「少しは、悪いなとは思っているんだけど、調子が悪いことは悪いんだ。ま、さ来週には、病院を抜け出して学校に行くことはできると思うよ」

「田沼さん無理はしなくていいですよ」

「君に親切にされると、なんか気持がわるいな。優しくして、僕の講義を取ろうというコンタンだろう」

「あはは、そうです！」

「そうだろうと思った。あはは。・・・いやあ、実は君に連絡を入れようと思っていたんだよ。また、リゾート海浜病院シリーズの新作を書かされることになった。今度は少し手強いテーマでね、古事記・日本書紀の謎を解くということなんだ。ああ、そう言えば、古事記・日本書紀は早川君が専門だったなと思い出したんだよ」

「まあ、国文科ですからね、知らないといったら嘘になりますけど、ご期待にそえますかどうか。まあ、遊びに来るつもりで、伺いますよ」

「それは、ありがたい。頼むよ」

「いまね、古事記と日本書紀のイザナミ・イザナギの国生みのところを照らし合わせていたところなんだが、変な事に気がついたんだ」
「ああ、それならば推測がきますよ。きつとあれですね」

「まあ、ちよつと僕の言うのを聞いててくれ。君には聞き飽きた話かも知れないが僕にはこの発見は新鮮なんだよ」

「そうですね。前から詩人の眼で記紀（古事記・日本書紀）をみるとどんなのかなという興味はありましたから、ここではおとなしく聞いていましょう」

「うむ、いい子だ。それじゃ、はじめろぞ」

田沼は、応接テーブルにおいてある、古事記岩波文庫・倉野憲司校注2003年版を手元に引き寄せた。

「まず、太安万侶の序文に続いて、古事記本文の巻頭は始まるね、今から読むのは、もちろん私なりの解釈でかみ砕いた文だ。まず、最初に倉野氏の解釈文を読んで、本の後ろの方に載っている漢字の原文とてらしあわせるのだ。すると、どんな高名な学者であつても現代文に関しては小説家にも詩人には負ける文章であることがまゝある事だから、僕なりの現代語訳が出来上がるワケだ。もちろん意味不明の単語があれば古語辞典・漢和辞典などで調べてみる。そして、僕の現代語訳を文庫本の解釈文の横に、書いてしまうんだ。したがって僕が読んだ本などは古本屋では二束三文で売り物になんない。それで僕はいつも貧乏で、チャーハンばかり自分で作って食べるハメになるのだよ。アハハ。これはね若い頃、フランス語で書かれた詩集などの訳文の下に、僕の訳詩を書いたりしたくせのなごりなんだ。・・・あ、いけない、脇道にそれてしまった。これも君が悪いんだ、君といるとつい軽口がでてしまうからね」

祐司は、笑いをこらえて、田沼を見ている。

「ハイ、続けます。・・・天地が初めて発した時、たかまがはら高天原に成れる神の名は天之御中主神。あめのみなかぬしのかみ次に高御産巢日神。たかみむすひのかみ次に神産巢日神。かみむすひのかみこの三柱の神は、連れ合いを持たない単独の神で、身を隠されています。この時、国土は幼くて、いまだ水に浮いた油のようであり、ク

ラゲのように漂う時、葦の芽が勢いよく生えるように成れる神は宇
摩志阿斯訶備比古遲神。うましあしかびひこぢのかみ次に天之常立神。あめのとこたちのかみこの二柱の神も、連れ合
いを持たない単独の神でありまして身を隠されていました。上記の
五神は高天原のなかでも特別の神でおられます・・・どうだ？」
「良いですね、続けてください」

詩人、古事記を訳す 一

「次に成れる神の名は、くにのこたちのかみ国之常立神（国土の神）、次にとよくもののかみ豊雲野神。この二柱の神も、連れ合いのない、独神の神で身を隠されてしまった。次に成れる神はういちのかみ宇比地兩神、次にいもすひちのかみ妹須比智邇神、次につのくいのかみ角杙神次にいもいくひのかみ妹活杙神。次におほとのちのかみ意富斗能地神、次にいもおおとのべのかみ妹大斗乃辨神。次におもたろのかみ於母陀流神次にいもあやかしこねのかみ妹阿夜訶志古泥神。次にいざなぎのかみ伊邪那岐神、次にいもいざなぎのかみ妹伊邪那美神前記の国之常立神からいざなぎのかみ伊邪那美神以前を、あわせて神世七代と言います（上の二柱の独神は、各一代とし、次の男女十神は二神をあわせて一代と数える）

ここに別格なる五柱の天つ神はいざなぎのみこと伊邪那岐命、いざなみのみこと伊邪那美命二柱の神にみことのり詔した。『この漂える国を固め修めよ』そして天のあめ沼矛ぬぼし贈つて委任なさった。それゆえ二神は天のあま浮き橋（神が下界に降りるときに天空に浮いて架かる橋）に立って、その沼矛を油のように漂う物にさしおろしてかき混ぜました。こおろ、こおろとかき混ぜて、沼矛をひきあげる時、その矛の先からしたり落ちる塩が重なり積もって島となった。これがおののくに淤能碁呂島である。その島に二神は天下りなさって、りっぱな柱を選んで立て大変広い御殿を建てられました。そうしていざなぎのみこと伊邪那岐命は、いざなみのみこと伊邪那美命に問われました。『あなたの身はどのようにできていますか』答えられて『私の身はなりあがりましたが、いまだなりあがらない所が一力所あります』それを聞いて、伊邪那岐命はおっしゃりました。『我が身は成り上がって成りすぎた所が一力所あります。だから、この我が身の成りすぎた所をもって、あなたの身のなりきれない所に刺しふさいで、国土を生もうと思う。どうであろうか』・・・やや、これは山辺さんみたいなレディのいるところでは、恥ずかしくて声にできないきわどい話しだね。今日は、来ていなくてよかったなあ・・・と、田沼は早川君の顔を見つめてにやりとした。

「さて、先を急ぐよ。．．．伊邪那美命は、それに答えて言った。
『それでよいでしょう』と。伊邪那岐命は、その言葉を受けておっ
しやりました。『それならば私とあなたは、この天の御柱を反対方
向にまわって巡りあったところで交わろうではないか』．．．これ
も、あからさまな話だねえ．．．」

詩人、古事記を訳す 二

「このように約束して、伊邪那岐命が『あなたは右に回り、私は左に回り、出会いますよ』と言ったあと、二人は柱を回り始めた。二人が出会い伊邪那美命が先に『あれまあ良い男だ事！』と言った後、伊邪那岐命が『荒れまあ良い女だ事！』と言った。

そのあと、伊邪那岐命がその妻に『女の人が先に声をかけるのは良くない』と言われた。寝屋で交わって生んだ子は、人の血を吸うヒルのような骨なし子であった。この子は葦あしの草で編んだ葦船に乗せて流し去らせた。次には淡島あわしま（不詳）を生みました。この子もまた、子としては扱いませんでした。こうした事で二柱の神は、相談して、口々に『今、私達が作った子はよい子ではなかった。天つ神にお聞きしましょう』と言われた。それで共に天上に上がって天つ神にご意見を求めた。天つ神は太占ふとまに（鹿の肩骨を桜の木の皮で焼いて吉凶を占う事）を行っておっしゃられた。『女が先に言ったから良くないのだ。また帰り降りて、男が先に言うように改めなさい』と。帰り降りて、二柱はふたたび、天の御柱を回った。伊邪那岐は言った。『あれまあ良い女だ事！』伊邪那美は言った。『あれまあ良い男だこと！』と。こうして二注が寝屋で交わって産んだ子は淡路島であった。次に四国島を産まれたが、この島は胴体一つで顔が四つあった。顔ごとに名前があり、伊予の国は愛媛あいづみと言い、讃岐の国は飯依比古いひよりひこと言い、阿波の国は大宣都比賣おおのけつひめと言い、土佐の国を建依別たけよりわけと言った。次に隠岐の三島を生んだ。この島の別名は天忍許呂別めのあしころわけと言った。次に筑紫の島を産んだ。この島もまた、身一つで顔が四つあった。筑紫の国（筑前・筑後）は白日別しらひわけと言い、豊国とよくに（豊前・豊後）を豊日別とよひわけと言い、肥国ひのくに（肥前・肥後）を建日向日たけひむか豊久士比泥別ひとよくじひねわけと言い、熊曾の国は建日別あめひつひわけと言った。次に壱岐島を産んだ。この島のまたの名を天比登都柱あまのたてよりひめと言った。次に対馬を産んだ。この島のまたの名を天之狭手依姫あまのせうでよりひめと言った。次に大倭豊秋津島おおやまととよあきつしま（本

州島）を産まれた。この島のまたの名を天御虚空豊秋津根別あまつみそらとよあきつねわけと言った。これら八島を先に産んだ島なので大八島国と言った」

ここまで読んできた田沼は言葉を止めて早川に眼を移した。

「この後、群小の島が産まれ、様々な神が産まれ、最後に火の神を産んで伊邪那美の命は亡くなって黄泉よみの国に言ってしまう訳なのだが、今までの訳はどうか？」

「解りやすくして良いですね。さすが詩人、酒ばかり飲んでいるのではないと言ったことがわかりますね」

「君にそう言ってもらえると安心するよ。しかし、その言葉には、ちよつと棘とげがあるね。・・・この、古事記巻頭の文を次に読む日本書紀巻頭の文と比べてみようと思っているんだよ。そうすれば古事記と書紀の違いがいくらか分かんと思うのだな」

詩人、日本書紀を訳す 一

翌日の夕方、沙也香が田沼に、構想の進み方等を聞いているとき、ドアがノックされた。「どうぞ」と答えると、早川が入ってきた。

早川は、室内に立っている沙也香にちよつと驚いた風であつた。沙也香が和服であつたからである。今日、品川で沙也香の高校時代のクラスメートが結婚式を挙げたのだ。沙也香は、このところ田沼先生にご無沙汰であつたのと、日頃田沼から「君が和服を着たらキレイだろうな」などと言われていたので、それでは先生の所に行こうと思い、夕方時ではあるが、やって来ていた。

田沼は早川に声をかけた。

「おや、いらつしゃい。早川君、ここにおられる女史が、文化浪漫社の編集社員山辺沙也香さんだ。沙也香さん、彼がうわさの西鎌倉女子大学の助教授の早川祐司さんだ」

「うあ、祐司さんなんて田沼先生にいわれると、ゾクゾクとするなあ。・・・あ、初めまして、先生御用達のきれいな出版社員がいると、先生から聞いていました。あなたですか、光栄です。よろしく願ひいたします」

「先生はお世辞が上手なんですよ。がっかりなさつたでしょう」

「いえいえ」祐司は顔を横に振つてにつこり微笑んでみせた。沙也香も微笑んだ。

「文化浪漫社の出版部におられるなら、歴史専門出版社ですから歴史にお詳しいんでしょうね」

「紺屋の白袴とよく言いますね、私もそのたぐいなんです。歴史は好きなんですけど歴史書をそんなに深く読み込んではいません」

「そうですか、でも、歴史に少しでも詳しいなんて、良いですね」

「うむ、若い者どうして盛り上がってるな。おじさんを置いてけぼりにしないで下さいね」

「あ、先生失礼しました。そこにいたんですか」と、祐司が混ぜっ

返した。

「はいはい、解りました。解りました。そろそろ、お勉強を始めましょうね、小生意気な生徒諸君」

「はい」と二人の声が同時であった。

「うむ、返事だけはよろしい。それでは、始めるぞ、質問などは後で頼むね」

田沼はすでにそこに置いてあった応接セットのテーブルの上に置いたPCプリントを取り上げた。

「エート、これも古事記と同じように、私が訳した物だ。ちなみに日本書紀には古事記に太安万侶が書いているような序文などはない。『日本書紀 巻第一 神代上』の題名のあとこう始まる。……天地がいまだ別れず陰と陽も未だ別れない古い昔、混沌であることはぐるぐる回る溶き卵のようでしたが、かすかにきざしのようなものがあるようでありました。その中で澄んだ物が分かれたなびいて天となり、重くにこったものは積もって大地となるに及んで、精妙な物質はつながりやすく、重く濁った物質は固まりがったかった。……あの、早川生徒君、沙也香さんの方はかり横目で見てないで聞いてくださいね」

早川は顔を赤くして言った。「濡れ衣だ！聞いてますよ、田沼教授」沙也香は、そのやりとりが面白くてクスと笑った。

詩人、日本書紀を訳す 二

「それゆえ、天がまず成立して、地はその後できあがった。その結果、神はその中に、お生まれになった。それで以下のような伝承が残された。この世の始めに大地の浮き漂うありさまは、たとえば泳ぎ回る魚が、水の上に浮かぶようである。そのようなときに天と地のあいだに一つの物が姿を現した。形は葦あしの芽のようである。それがすなわち神へと変化した。国常立尊くにとたちのみことと言った。（極限に尊みことい方を尊みことといい、それに続く方を命みことと呼ぶ。以下はそのように記す）次に生まれたのは国狭槌尊くにとつちのみこと、次に豊斟淳尊とよくむめのみこと。以上三神が最初に天地を治められました。いまだ女性というものはなく、単独な性として男性でありました。

（始原の時については、多くの書が、様々に書いている。以下はその列記である）

一書が言うには天地が初めて別れるとき一つの物が無の中になりました。その形は表現しがたい物でした。そうした有様から神がお生まれになったのです。国常立尊くにとたちのみことと名付けられた。または国底立尊くにとそたちのみこととも言いました。次に生まれたのが国狭槌命くにとつちのみことまたは国狭立命くにとたちのみことと言った。次に豊国主命とよくにぬしのみことまたは豊組野命とよぐみのみことと言った。または豊齧野命とよかむのみことまたは葉木国野命はきくにのみことまたは見野命みのみことと言った。

また他の一書が言うには、大昔国が幼く、大地が未熟だった時に例えれば浮かべた油のように漂っていた。その時に国の中に物が発生した。形は葦の新芽の育つに似ていた。これによって生まれた神があった。可美葦牙彦舅尊うましあしかびひこのみことと言われた。次に国常立尊くにとたちのみこと。次に国狭槌尊くにとつちのみこと。

また他の一書が言うことには天地が、いまだ混成している時に初めて神があらわれた。可美葦牙彦舅尊うましあしかびひこのみこと。次に国底立命くにとそたちのみこと。

また他の一書が言うには、大地が初めて別れるとき、それとも

に発生した神があつた。くこのとこ「たちのみこと」国常立尊と言つた。次に国狭槌尊。くこのさつちのみことまた高天原におられる神の名を天御中主尊あめのみなかぬしのみことと言ふ。次に高皇産靈尊。たかみむすひのみこと次に神皇産靈尊」

ここまで来て、田沼はプリントから顔をあげた。「どうだ、だいぶ飽きてきたのではないかね。この一書に言ふは、まだまだ続くけど我慢して聞いて欲しい。これが、古事記と日本書紀のきわだった違いだからね。書紀は原典の書名は伏せているが、諸家に伝わる書の内容を、一つ一つ記載しているのが解るね」

詩人、日本書紀を訳す 三

「また他の一書が言うには、天地が未だ固まらないときは、あたかも海の上に浮かぶ根のない雲のような有様であつた。その中に何ものが産まれた。葦の芽が始めて泥の中から生え出す清らかさを持ったものである。それが人の形になった。国常立命くにとりたちのみことと言う。

また他の一書が言うには、天地が始めて別れた時には、あるものがあり、葦の芽のようで空の中に生まれた。これから出られた神は天常立尊あめのとこたちのみことという。次に出られた方は可美葦牙彦舅尊つましあしかびひこのみことという。また空の中にあるものがあり、浮かんだ油のようなようで、これから生まれた神を国常立尊くにとりたちのみことという。

次に神が生まれた？土？尊ついににのみこと、沙土？尊すいににのみことである。そのつぎに神が生まれた大戸之道尊おおとのじよのみこと、大苦辺尊おおとまへののみこと。つぎにも神が生まれた。面足尊おもたうのみこと、惶根尊こほのみことである。次に神が生まれた。伊奘諾尊いさなのみこと、伊奘冉尊いざなみのみことである。

一書が言うには、この二柱の神は青檀城根尊あおかしきしねのみことの子である。

また、他の一書が言うには、国常立尊くにとりたちのみことが天鏡尊あめのよろずのみことを生んだ。天鏡尊あめのよろずのみことが天万尊あめのよろずのみことを生んだ。天万尊あめのよろずのみことが沫蕩尊あわなぎのみことを生んだ。沫蕩尊あわなぎのみことが伊奘諾尊いさなのみことを生んだ。

正統な伝承によれば（上記一書がいうには、……。前の文）、まとめると八柱の神がおいでになった。陰陽の気が混じり合い、この神々は男女の両性を持つておられた。国常立尊から伊奘諾尊・伊奘冉尊に至るまでを神世七代という」

田沼は、プリントから再び目をあげた。そして二人を見た。そして言った。

「一書云々の前には、いわば日本書紀の公式見解が書かれていて、

そのあとに、異説として多くの書からの文が転載されているというのが解るね。だから、書紀は公式見解を強引に押しつけている訳ではないのだ。こんな記録があるよと、わりとフェアな姿勢なのだね。しかし、引用する書籍の名を「一書」と書いて伏せている姿勢にはフェアでない姿勢が見えるのだ。これには何か理由があるに違いなと思うのだよ。さていよいよ次はお待ちかねイザナギ・イザナミの話だよ。古事記とどう違うかに注意して聞いて欲しいね」

田沼はプリントに目を落として再び読み始めた。

詩人、日本書紀を訳す 四

「伊奘諾尊・伊奘冉尊は天と地に架かる橋に立たれ、話しあわれ」
この底の下に、国があるはずである』と言われた。そして玉で飾つた矛をさしおろして探ると、そこに青海原が現れた。その矛の先から滴る潮が固まって一つの嶋となったのだ。それを？ 馭慮嶋と名付けた。ここに、二柱の神はその島に降りられて、夫婦の行為をなされ、州と国を生もうとした。？ 馭慮嶋を国の中心の柱として陽神は左に回り、陰神は右に回った。国の柱をめぐって、二神は顔を会わした。

その時、陰神がまず声を出して言った。『ああ嬉しい。なんと良い男に出会ったのだろ』陽神は、これを喜ばずに言った。『私は男である。理では、最初に声をかけるべきであるのに、どうしてかえって婦人が声をかけるのであるか。よろしくないことになった。改めて柱の周りを回るべきである』と。

そうして、二神はさらに再び柱の周りを回り、巡り会った。今度は、陽神がまず声を出して言った。

『ああ嬉しい。なんと良い乙女に会えたのだろ』そしてさらに言葉を重ねて陰神に聞いた。『今、あなたの身に何かできあがっているところがありますか』答えて言うに『私の身には一つの雌のはじまりという所があります』陽神が言った。『私の身にも、また雄の始めというところがあります。私の身の雄の始めという所を以てあなたの始めのところに合わせようと思う』

ここに陰陽を始めて、あい合わせて夫婦となった。

子を産むときになって、まず淡路島をもって、身内とされた。二神には、この子は意にそぐわないところがあった。それゆえ、吾恥という意味を持つ、淡路島と呼んだ。そして大日本豊秋津州を生んだ。次に伊予の二名島（四国）を、生んだ。次に筑紫の島を生んだ。

次に隠岐の島と佐渡の島を双子として生んだ。次に越の島（北陸）を生んだ。次に大州（不詳）を生んだ。次に吉備子州（吉備の児島半島）を生んだ。以上の誕生をもって、大八州の名ができた。対馬、壱岐の島、諸所の小島はみな潮の泡が固まって出来たという」

田沼はプリントから目をあげ、言葉を切って、二人を交互に見つめた。そして言った。

「さて、ここまでが日本書紀の国生みの本論で、次に読むのが、諸家に伝わる『一書に言つ』という各論なんだ」

詩人、日本書紀を訳す 五

「一書に言うには、天神は伊奘諸尊・伊奘冉尊に「豊葦原の千五百秋の瑞穂の地というのがある。あなたが行って治めるべきである」と言われ、天瓊矛を下さった。

そこで二柱の神は天上浮橋に立って、矛をさしおろして大地を求めた。青海原をかき回して引き揚げるときに、矛の先から滴り落ちる潮が固まって島となった。これを名付けて「馭慮嶋」と言った。

二神はこの島に降りたつて広大な御殿を建てられた。また天を支える主柱も建てられた。陽神は陰神に問われた「あなたの身に何かできあがったものがありますか」答えていうには「私の身はできあがって、陰のはじめと言うものがひとところあります」

陽神は言った。「私の身にもまた、できあがって、陽のはじめというものがひとところあります。私の陽のはじめをもって、あなたの陰のはじめに合わせようと思う。あなたは柱を左に回りなさい。私は右にまわりましょう」

別れて回り出会ったときに陰神がまず声を上げた。

『ああなんて、いい男だこと』ついに交わって最初に蛭子を生んだ。それで、葦の舟に乗せて流してしまいました。次に淡島を生み出した。この子は子供の数には入れませんでした。

そのため天に戻って、こと細かくその有様を申し上げました。これを聞いた天神は鹿の肩骨を焼いて占いを行い、言われた。

『女性が最初に声をかけたからなのです。もう一度もどりなさい』そうして、帰還に良い時をも占って戻された。

二神は、また改めて柱を回られた。陽神は左に周り女神は右に回った。二神が再びであった時に陽神は言われた『ああ、良い娘だ』陰神は後に答えて言った。『ああ良い男だ』

そうしたのちに、同じ宮に住み子を生んだ。大日本豊秋津島と名付けた。次に淡路島。次に伊予二名島（四国）。次に筑紫島。次に

隠岐の三子の島。次に佐渡島。次に越こしの島（能登半島。島であつたという説がある）。次に吉備子島きびのこしま（岡山県の児島半島。これもかつては島であつたのであろう）。これによって全てを大八州国おおやしまのくにと名付けた。

また他の一書に言う。二神は天霧あまぎりの中に立つて、『私は国を得よう』と言われた。そして天瓊あめのぬほこ矛を、さしおろして探られると？おのころ馭慮島じまを得た。それで矛を抜き揚げて喜んで言つた『良かった。国があつた』

また他の一書に言う。二神は高天原たかまがはらにおられて言われた。『国こそあれ』と。そして矛をもつてかき混ぜて作つた。

また他の一書に言う。二神が語り合つて言われるには『なにかあぶらのような物が浮かんでいる。あの中に国があるだろう』と言つて、玉飾りの矛をもつて海をかき混ぜて島を作つた。

また、他の一書が言う。陰神が先に言われた。『ああうれしい。良い男だこと』と。この時に、陰神の言葉が先になつたことを、礼節に叶わないと、もう一度、柱の周りを回つた。そして、陽神が『ああうれしい、良い娘だこと』そうして遂に交合しようとしたが、その方法を知らなかつた。その時キレイが飛んできてしきりに腰を振つた。二神はそれを見て、交わる方法を知つた。』

田沼は再び、プリントから目をあげて、沙也香にちろりと視線を当てた。沙也香は恥ずかしがると言うより、あきれた顔をしていた。田沼は言つた。

「どうだい。このあつけらかんとした描写は。まことに以て、これではセクハラみたいになつてしまふが、仕事のためだ我慢して下さ

い。ああ喉が渴いた」

田沼は缶ビール二本とノンアルコールビールを冷蔵庫から出して、二人にビール、自分のためにはノンアルコールを配って。栓を開けた。

詩人、日本書紀を訳す 六

「一書の言うには・・・は、一見、同じ文の繰り返しに見えるが、少しずつ内容や言葉使いが変わっているんだ。ちよつと退屈になってきたと思うけど、わりと原文に忠実に訳しているから、生徒諸君はがまんしてその違いに気をつけながら聞くように。もう少しだから我慢我慢。オホン」

詩人はさらにプリントを読み続けた。

「他の一書に言うには、二柱の神は夫婦の交わりをして、まず淡路島をもつて、身内とし、大日本豊秋津島を生んだ。次に伊予の島。次に筑紫の島。次に隠岐の島と佐渡の島のふたご。次に越の島。次に大島。次に子島」

「他の一書に言うには、まず淡路島を生む。次に大日本豊秋津島。次に伊予の二名島。次に隠岐の島。次に佐渡の島。次に筑紫の島。次に壱岐の島。次に対馬」

「・・・さて、あと三条ほど、一書によればが、続くのだが、あとはまあほとんど同じ文であるから、ここは、はしょってしまおう・・・以上で、いささか退屈な講義は終わりだ・・・やれやれ。これを訳すのはかなり嫌になったよ」

沙也香は言った。「ご苦労様です。大変で病氣悪くなりそうじゃありませんか・・・私、いままで日本書紀に目を通した事がなかったんですけど、古事記がシンプルであるのに比べて、くどいぐらい多くの書から引用しているのが、印象的です」

その言葉を早川が受けて答えた「そうそう、だれでも、日本書紀がそのような書き方をしていることに最初驚くんだよ。ここでの他書の引用は十書なんだ。田沼さんの訳文を聞いていると、十書を引用するまえに、書記は書記の公式文とも言つべき文を提示している

のが解ると思う。だから単純に読もうとするならば、一書の引用を読まなければいいのだ、なんて乱暴な事もいえるのです。また、反対に公式文を読まずに、一書に言うの中の、気に入った条を繋いで行けば別の物語を読めるという多重人格みたいな所を日本書紀はもっている不思議な書なんだ」

田沼は、それを受けて言った。「そうか、だから、読むのが嫌になっってしまう様な印象があるのか。難しいのでなくて、複雑な構造をされていて、理解しにくいということだね」

「そうなんです。書記は各論をそのまま読む人になげだしてくるのです」

沙也香が言った。「私、古事記は前に読んだ事があるんですけど、日本書紀の内容を知るのは今度が始めてなんです。きっと同じ記事なんだろうなと思っていましたけど、随分違うと言うことが解りました」

たった三人の研究会

田沼はグラスに入れたノンアルコールビールをごくりと、うまそうに飲んだ。そして言った。

「さて、これから先は研究会だ。今までの部分に三人で検討を加えようという算段だ」

「え、今日はこれでお開きではないんですか」と祐司は声を上げた。「僕が、大病ながら、夜寝る間も惜しんで記紀の訳を書いたのは、君たちの為なんだぞ。独身どうしでどこかの洒落たレストランに行こうなどという良からぬ考えは許さないぞ」

「え？独身！」若い二人は顔を見あわせて異口同音に声を上げた。

「そうさ、君たちは三十代で独身どうしだ、もう60才に手がとどきそうな、鬼の様なかみさんを持つ僕にはうらやましくてならんね・・・まあ検討会にあまり時間をかけないから、後は好きにやりなさい」

と田沼は言つて、二人の顔を交互に見た後、意味ありげに微笑んだ。

「さて、それでは検討会を開始しよう。この中で、どちらかというと、一番記紀（注・古事記と日本書紀をまとめている言葉）について知識がないのは沙也香君かな、その沙也香君から感想を聞いてみたい。そう、中途半端に知っているより。わりと真実を見つけることができそうだからだ。じゃ、沙也香君どうぞ」

「そうですね・・・さっき言った、いろんな、今は失われた書から文を引用しているということですね。研究者にとっては今はない書名は伏せられているのが残念というところです。それから引用された、文に登場する神様がおおむね同じでも、微妙に異なっていて、そのおたがいの関係とか偉さも違うようですね。それから記紀が正説している、主文の出所が不明です」

「そうか。じゃ、次に祐司君だ」

「エート、そうですね・・・古事記の太安万侶の書く、序文がなんだか余りにも生々しいという感じですね。古事記が作成される来歴が、細部にわたって書かれすぎていて、まるで、この文だけが、古代から抜け出してきた、直接私達に話しかけているように感じます。本文に関しては書紀より古いはずなのに、かえって明晰で書紀より新しい感じがします。しかし、いざなみ、いざなぎの神の国生みの記事は、小学生には読ませられないような露骨な描写ですね。これが、この文章の古さを表しているのかなとも考えられます・・・それからコオロコオロとかき混ぜるという古事記の表現は、なんだか古代の牧歌さを感じられます。古事記には偽書説があるんです。古事記の後に作成された日本書紀や続日本紀しよくにほんぎに、古事記に関する記事が一切ないですね。古事記に関する史料は、全て古事記の太安万侶の序文から出ているだけなのです。その制作の過程も、成立年号も執筆者も稗田の阿礼も、古事記についての一切の資料は古事記序文によりしかないので。だから太安万侶の存在も疑われたんですが、これについては太安万侶が何者かを記さないですが、位階を受けた記事が日本書紀に記されているので、存在した人であることは間違いがないのですが、ただそれだけの記事なのです。ところで最近、太安万侶の墓と没年を示す墓碑が発見されて話題になりました。太安万侶が存在した事は間違いのない事実なのです。一部には、これをもって古事記真書の裏付けとする人がいますが、論理的に考えれば、古事記序文に記されている年号と太安万侶の没年が整合するという事だけしか判明しないのです。一方、日本書紀に関しては続日本紀に編纂される課程がしっかり記載されています。それとまた、記載の内容の分量の違いですね。ここにちょうど岩波文庫の日本書紀がありますが、現代文になおして日本書紀は1500ページ、古事記は200ページという差があります。このうち古事記に関しては、その最後の20ページが雄略天皇の後の代々の天皇の簡略な記事で推古天皇で終わっているのです。この分量の違

いは、神代紀の簡略さと、天皇代の記事の少なさから来ているのですね。まあ、神代紀は少ないと言うより、日本書紀にある、一書引用の羅列がないということもあるのですがね・・・」

「うん、ありがとう。僕の意見はまた、後の日ということにしよう。海岸もすっかり夕陽になってしまったようだよ。水銀灯も紫色に点灯しはじめているよ。そうだこの先の海岸にドイツのおばさんがやっているハンバーグレストランがあるよ、そのハンバーグや自家製ウインナソーセージや酢キャベツやドイツビールはなかなかのものだよ。君たちには、いささかお節介かもしれないが、その店に予約を入れておいたよ。コース料理は僕のおごりだ。酒は自分で払いなさい。君たちはヤマタノオロチみたいにお酒飲みだからね、そこまではめんどろ見切れないね。なにせ、詩があまり売れない、エッセイが収入の主な僕だからね」

ふたたび研究会

十二月の半ばになった。何となく年の暮れの気配が、祐司の大学にも、沙也香の出版社にもただよって、一日ぐらいなら閑がとれて、また病室に昼過ぎ三人が集まった。

「あれから、どうしたなんて、野暮な事は聞かないよ。．．．．．で、どうだったの．．．」

「あはは、聞いているじゃないですか。御飯を食べて、カラオケやって別れました。ね、沙也香さん」

沙也香は、「メ」という顔で、田沼を可愛らしくにらめつけた。

「オホン．．．さて、研究会開始！．．．この前の記紀についての感想からすると、君たちが見落とした重大な事がある」

「え、それはなんですか」と祐司は声をあげた。

「古事記ではイザナギとイザナミが生んだ島・地域の順番が淡路島・四国・隠岐の三島・筑紫（筑前、筑後地域）・豊国（豊前、豊後）・肥の国（肥前・肥後）・熊蘇くまその国（熊本南部、鹿児島）・壱岐島・対馬・佐渡・大倭おおやまと豊秋津島（大和を中心とした幾内）で、ここまでを最初に生んで大八島国であるとしている。さらに吉備の児島（岡山県児島半島）・小豆島・大島（山口県の大島か）・女島ひめじま（大分県国東半島の東北の姫島か）・五島列島・両児島ふたこのしま（長崎県男女群島）だ」老眼鏡をかけ、目をプリントに落として読んでいた田沼が目をあげた。田沼のめがねは遠近両用だから、めがねを下げて、視線を送ってくるような事はなかった。

高そうな金縁のめがねである。

「この順番が問題だね。最初に生まれた島々または地域の一群を大八島国おやしまくにと読んでいるね。この呼び名は、自らを大和国と言う前の古い国名と思うのだが、なんとこの一群で最後に生まれるのが、近畿

地方の古名であると言われている大倭豊秋津島^{おおやまとあきつしま}なんだ。この順番が日本書紀では、本文においても。引用する一書でも、最初に生まれるのが大倭秋津島^{おおやまとあきつしま}だ。そして最後に生まれるのが、古事記にはない越の国（富山、新潟）だ。この表記には明らかにある秘密が隠されていると僕は思う。日本書紀編纂時に、古事記のようであった誕生の順番が入れ替えられ追記されたと僕は考えるのだ。古事記が、太安万侶の序文によらなくても日本書紀よりずっと古い文章である証拠を、僕は古事記の文から読み取ったんだ。それはね、日本書紀にある越の国が、古事記にはないと言うことだ。越の国は八世紀頃になつてやつと倭人のエリアに入ってきた、アイヌの領地だから、古事記が古い歴史書であるなら、古事記に越の国の誕生の記事がないのは当然だ。・・・太安万侶の序文では、日本書紀に先立つ十年前に完成した事を示す、年号が書いてあるのだけれど、実際には古事記の成立は日本書紀成立より相当前であつたと思われるね。・・・僕の考えでは50年ぐらひは充分に古いと、思う。だから古事記は最初には文字でなく稗田阿礼のような者による口承による伝承の歴史だつたのではないかな。・・・ところで日本書紀が、ここでは、地域の生まれた順番を書くことを控えているように見えるのも怪しさをつのらせるね。一書を羅列するけど、国生みの順番をかいてるのは、本文と次に引用する一書のみなのだ」

ふたたび研究会 二

「よく分からないかな？もう少し詳しく説明しよう。古事記の序文よれば、古事記は和銅五年（712年）に天皇に献上されたとある。日本書記については「続日本紀」の養老四年（720年）五月の条に『以前から、一品位の舍人親王とねいは天皇の命を受け、日本紀の編纂にあたっていたが、このほど完成を見て、紀三十卷系図一卷を献上した』とある。だから、二書の記事が正しいとすると、古事記が出来てから八年後に日本書記が出来たということだ。歴史の長いスパンから見れば、八年という成立の差は

ないに等しいと言える。それであるのに日本書記には越の国が生まれた記事があり、古事記にはない。これはどういうことだろうか。・つまり、その理由はこうだと思う。日本書記が書かれた時には『越の国』は天皇家の支配の領域に入っていたが、古事記が書かれた時には『越の国』は、まだ支配する領域に入っていなかったと言うことなのだろう。それがたった八年の差であるはずがない。古事記が出来てから日本書記ができるまでには相当の長い年月があるはずだ」

「太安万侶は古事記はもとより、日本書記の編纂にも関わっていたと、聞いていますが、どうしてこうした記事の矛盾を放置したのですかね？」と祐司は言った。

「そう、それだよ。太安万侶は日本書紀の時代の人だ。もし古事記が書紀より50年前に作られたと仮定すると、太安万侶が古事記を編纂出来るわけがない。つまり、太安万侶は古事記の製作に関与していないのだ。またたとえ古事記製作に関与していたら、越の国が生まれたことを落とすわけがないじゃないか」

「え！太安万侶は古事記の作者じゃないのですか」と、沙也香が声を上げた。

「そうとも、断じて、古事記の作者ではない。古事記本文に、太安

万侶と言つ名を使つて誰かが序を書いたのだよ。それに、この説を補強する発見がまだあると言つことを次に話そう。古事記の文のなかにはね、いわばビッグバンの背景放射のような、大和朝廷以前を示す、はるかなる声がちりばめられているのだよ。」

「宇宙がビッグバンのなごりを360度の方向から背景放射として、かすかなノイズをいまだに送ってよこしているのに似て、古事記はその創作の古さを、書中にしのばせているように愚鈍の僕にさえ感じられるんだ。その一が、国生みに『越の国』の記事がないことだ。その二が、国生みが『淡路島・四国』で始まり、『筑紫』諸国をしつかり生んだ後、一番最後に『近畿』を生むことであり、その三が。別^{わけ}という、地名の存在があることであり、その四が、国生みの際のスマートでない露骨なあつけらかんとした性描写だ。その五が、久羅下^{くらげなすただよへる}那洲多陀用弊流といった表記をして、現在なら『海^{くらげ}月なす漂へる』とかくべき表記をいまだ持たないことである。古事記にあつて書記にないものは、めだつものに関してはこの五つだけど、子細にみれば、きつとまだ何かがあるに違いないけれど、いまはこの五つの証拠の検証で済まそうと思う。

その一についてはすでに話した通りなんだが、その二の、国生みが淡路島、四国で始まる話は、日本書紀では、引用する『一書』において、すべて大倭豊秋津洲^{おおやまととよあきつあしま}（大和地域）から始まる話となっているが、これは、書紀編纂時に『一書』の国生みの順番を改竄した可能性が高いと思うのだ。これは古事記においては、近畿地域はさして重要な地域ではないが、日本書紀にとっては、当然のことながら重要な地域であることを示している。これは国生みの順番が古事記の通りであるのなら、この列島は、大和朝廷が興る前に、淡路島・四国において、最初の王朝の興隆を見ているはずであるという推測を喚起させうるね。古事記は、このように大和王朝以前の諸王国の時代を記録しているとは言えないだろうか。たとえば『吉備王朝』とかね……。古事記という歴史書の巻頭の部分は、大和王朝のものでなく、いずれかの『吉備』や『筑紫』の古王朝の歴史書

であつた可能性はないだろうか・・・」

田沼はそう言いながら祐司に質問するような視線をおくつた。祐司は古事記と日本書紀の国生みの部分を開いて見比べながら言った。「気がつきませんでした。そうですね、たしかに順番がちがいますね。これは良い着眼点ですね。古事記が日本書紀よりも編纂年次が早いのなら、古事記には国生み神話の古形が残されているという事でしょうね。一説に言われる、古事記が、日本書紀の要約本であるというのなら、近畿が国生みの最後にされて、越の国が表記されていない理由が見あたりませんか」

ふたたび研究会 四

「まったくその通りだね。それはすごく良い視点だ。・・・さて、次に、その三 別わけについての考察だ。古事記の国生みにさいして、不思議な地名が出てきたのを覚えているかい。抜粹すると、『土佐の国は建たけ依とり別わけと云う。次に隠岐の三つ子の島を生んだ。またの名をあめのおしころわわけ天あめ之忍許呂別ころわわけ。次に筑紫の島を生んだ。この島もまた、身体が一つで顔が四つあった。顔ごとに名前があり、筑紫の国は白しろ日ひ別わけといい、豊とよの国は豊とよ日ひ別わけといい、肥ひの国は建たけ日ひ向むか日ひ豊とよ久く土と比ひ泥ね別わけといい、熊曾国は建たけ日ひ別わけという。』(中略) 次おに大倭豊秋津島おあきつしまを生んだ。またの名を天御虚空豊秋常別あまつみそらとよあきつねわけと云った。この。別という地名は、日本書紀ではきれいに消去されてしまっている。この地名は一体何なんだろうか。僕が思うに、ひょっとしたら、大和支配以前の古い地名ではなからうかと思うのだよ。北海道に。別べつという地名がおおいけど、古事記の別わけと密接な関係があるように思えるのだ。僕が調べたかぎりでは、この別わけと別べつの関連について言及した書はないようだから、全く自分かつてな考察なんだけど・・・日本書紀が、この。別という地名を削除しているのは、この地名は古事記が偽造したものだ。だからだろうか？それとも、古事記の記事を知らなかったからだろうか？たぶん知っていただろうけど、おそらく、このことは、日本書紀の建前、つまり大和王朝成立の前に全国制覇の王朝は存在しなかったという事を突き崩しかねない、古王朝の地名だったからではなからうか。この場合、古王朝とはなんだろうか？アイヌの人々がつくる数多くの群小の村々ではなかったろうか。・・・こんな、メチャクチャな事をいうのは、根拠があるのだ。アイヌ語では川の事を『ペチ』といったそうで、川の流域を単位として地名とするのがアイヌの文化のなごりなんだが、それにのちの人が『別』という漢字をあてたわけだ。岩尾別、浜頓別、登別、幌別、芦別、江別、喜茂別、当別、秩父別、遠別、初山別、愛別、湧別、紋別、

稜別・・・北海道の地名を捜せば、いくらでも別の地名があるが、この地名は少なくとも平安時代以前から使われていた地名だと思われる。・・・その地名が九州や近畿にもあったと云うことを、古事記の。別々の地名はしめてはいないだろうか、それゆえ、日本書紀は、前支配者の残滓を抹消したという事なのかな」

御成通りの立ち飲みどころ

「次は第四の、古事記と日本書紀の性描写について検討したい所なんだけど、これは次の機会に検討しようか、沙也香さんを目の前においてあからさまで、いくらなんでも失礼だからね、後の日、おばさんになった沙也香さんから訴えられないとも限らないからね・・・」

「と田沼は沙也香をみて、いたずらっぽく笑った。
「だから、今日のところはこれで、おしまいとしよう。次回は祐司君と僕だけの密会とするよ、沙也香さん」

沙也香は口をとがらせて、不満そうな顔をしているが、内心は、祐司の前でそのようなあからさまな話にさらされたくはなかった。こつしたところが、田沼の優しいところで、詩人らしいデリケートな思いやりは沙也香の尊敬する所だった。それで、その不満顔もすぐ笑顔に戻った。

「そうですね。ヒヒじいの餌食になりたくないですもの。どうせ録音は残るのですから、後で聞かせていただきます。でも、お上品にお願いします」

「アハ、上品なわけがないだろう。詩壇では、こつみえても女好きの評判を頂いているんだよ」

「そんなこと、知っています。会社の編集部長が田沼先生の毒牙にかかるなよと、いつも云われてますから」

「あ、ひどい言い方だな。もう僕は君の会社の仕事は降りる。部長に伝えて欲しいね・・・アハハ」

先ほどまで、羊雲が赤く染まって、暗くなってきた海の上に広がっているのが見えたが、今はその赤い色もあせて、グレーの雲となっていた。

祐司と沙也香は灰色の羊雲の広がる海岸を歩いた。

「先生商売はね、のんきそうですが、結構、人間関係に気を遣わなければならぬですよ。教授の娘さんを妻に迎えると、まわりはとかくうるさいのですが、僕は女性に興味のないふりをして、切り抜けているのです。大学の研究室というものは、とかく能力でなく、閨閥でつながっているような所がありましてね、これから自分などはどうなることやら」

「ちよつと見たところ、良い仕事にみえますけど、いろいろあるんですね」

「そう、だから、思うんです、田沼先生みたいな文筆業になりたいなと・・・ところで、僕、行きつけのお店があるんですがいつてみますか。全然豪華な店ではないんですよ。立ち飲みですから。しかし良いお酒があります。沙也香さんだったら気に入って貰えそうです」

「鎌倉で立ち飲みですか？」

「鎌倉駅の西口の御成通りおなりに高崎屋という老舗の酒屋さんがあるんですけど、裏で立ち飲みをやっているんですよ。そこに集まる人がなかなか面白くて、人生の風雪を耐えてきたという人が多いんです。行ってみませんか？」

「一度覗いてみようかしら、立ち飲みは行った事がないんですよ」
「助教授の前は、単に研究員だったから、その立ち飲みには随分お世話になったんだ。ものすごい薄給だったからね。お新香が奥さんの自家製で美味しくてね、」

これに鎌倉お屋敷御用達の純米酒が一合550円だから、随分楽しませてもらったものさ」

御成通りは、鎌倉駅と大仏を繋げる、駅前のだ道筋にある。従来は、観光から取り残された、さびれた地元商店街であつたが、ここ十年来、観光地を歩こうという人々が増えて、そうした人々が、この商店街を活性化させつつあるのだらう。年ごとに町並みは美しくなつてきている。高崎屋は、この商店街の中核として、銘酒を扱い、

重きを為しているのだ。

田沼と祐司、二人だけの密談

助教授の祐司は、大学が冬休みに入ってしまったので、雑務から逃れて、田沼の所に来やすくなった。朝の鎌倉材木座の海は青く澄んで、雪化粧した富士山も相模湾と江の島の上に遠望できた。

昨夜、沙也香と高崎屋で楽しく飲んだ後、御成通りが駅前の江ノ電駅につながるあたりのお好み焼き屋「津久井」でお好み焼きと太麺の焼きそばを食べて沙也香を駅前まで送った。駅の改札口で祐司は沙也香を送りながら、沙也香を好きになりかけている自分に気がついた。沙也香さんは僕の事をどう思っているのだろうか・・・そんな、高校生のようなほのかな気持は久しぶりであった。

「よう、来ているな」と不在だった田沼が帰ってきたのは、祐司が窓越しに、海やトンビを眺めているときだった。「ああ、田沼さん、またどこか喫茶店でも行ってしまったのかと思っていたんですよ」

「いや、タバコは控えている僕だけど、たまにはパイプで香り高い草をくゆらせたくなくてね、海の見える庭で一服やっていたのさ」

田沼は手に持った、白い石で作られたパイプを応接セットのテーブルの上にコトリと置いた。祐二はは、それが、小説などに良くで

てくる海泡石かいほうせきという石で彫られた高級パイプだなと思った。

パイプと詩人といえば、あの放浪で有名な詩人ランボーもコーンの軸で作った、ポパイのようなパイプをくわえていたつけなともチラリと思った。

「それでは男同士の内緒話をはじめるか」と、田沼はいたずらつこの様に笑った。そうして、ベッド横に積み上げている本の中から古事記と日本書紀・第一巻を持ってきて、祐司の前に座った。

「古事記の、イザナギとイザナミの出会いと国生みの条を読んで、

それから日本書紀の、同じ内容の条を読んで、その表記の違いを明らかにしようと思う。・・・まず、古事記だ。・・・イザナミギ命は、イザナミの命に、『あなたのからだはどのように出来上がっていますか』と問うと『わたしのからだは出来上がって出来上がりきれないところが一カ所あります』と答えた。そこで、いざなぎの命は言った『私のからだは、出来上がって出来すぎた所が一カ所あります。だから、この私の出来過ぎたところで、あなたのからだの出来上がりきれない所に刺しふさいで、国土を生もうと思う。どうであろうか』と。イザナミ命はこれに答えて『よろしゅうございます』と言った。イザナギの命は、その言葉を受けて『それでは、私とあなたは、この天の御柱を回って会って、その所で交接しましょう』と言った。そうして次のように約束した。『あなたは右回りしなさい。私は左回りをします』と。約束を終えて回ったとき、イザナミ命が先に『ああなんて、いい男!』と言い、次にイザナギ命が『あなんて、いい女!』と言った。おのおの言い終えたあと、その妻に『女の人^{あし}が先に言うのは良くない』と言った。しかし、そのまま交接に移って生んだ子は骨のない蛭^{ひる}のような子であった。この子は葦船^{あしふね}に乗せて流し去らせた。次に淡島^{あわしま}（淡路島ではない。不詳）を生んだが、子とは認めなかった」

田沼と祐司、二人の検討会

「さて、日本書紀の国生みの記事はと言うとだね・・・陽神おがみは陰神めがみに問うて言った。『あなたの身体でなにか出来上がっているところがありますか』答えて『私の身体ができあがって陰めの始めという一所があります』と言った。それを聞いて陽神おがみは『私の身体にも出来上がって陽おの始めいう一所があります。私の身体の陽の始めでもって、あなたの身体の陰の始めにあわせようと思う』と言った。そのために天の柱を回ろうと決めて『あなたは左に回りなさい。私は右に回りましょう』と言った。

そうして二神は別れて回り、ふたたび出会った。陰神めがみは言った。『あらまあ、良い男だこと』陽神おがみはこれに答えて『あれ、まあ良い女だこと』と言った。ついに夫婦のなす事を果たして、蛭子を生んだ。蛭子は葦の船に乗せて流してやりました。次に淡島あわしま（吾恥島わがはじしま）を生みました、これも子供の内には、いれませんでした。このことによつて天に帰り昇つて、そのありさまを細かく天の神に申し上げた。天の神は鹿の骨を焼いて占いなさつて、言われた。『女が最初に声をあげた事がその原因でしょう。もどつてやり直しなさい』と。二神は改めて、また柱を回った。陽神は左に回り、陰神は右に回った。お互いが出会った時に、陽神がまず言った。『あれ、まあ良い女だこと』陰神が答えて言った。『あらまあ、良い男だこと』そうした後、宮を同じくして共に住んで児を生んだ。・・・以上が、書紀の記事だ」

田沼はプリントから目を上げた、そうして祐司を見ると言った。『どうかね、古事記と日本書紀の国生みを比べるとどう感じるかね？』

「ふーん。古事記の方がずっとエロチックですね。日本書紀は、極力エロチックさを出さないようにしているように見えます。古事記

の原文を日本書紀がなおしたとは言いませんが、古事記的な表現が元で日本書紀的な表現が後だと思えます。もっとも中には、日本書紀的なモラルある表現を変えて、後宮向けに作ったのが古事記なのだという説もあるそうですが、古事記の表現は、エロチックながら文学性としては日本書紀をはるかに越えるもので、どうも改作とは考えられない完成度がありますね」

「そうだよ、日本書紀は変に、モラルにこだわっている面があるね。古事記は、蛭子を平然と『流し捨て』のに書紀は蛭子にいたわりの目をもって、『流してやりました』と書くのだ。古事記の記事と日本書紀の記事の中に、創作年代の違いがまざまざと出ているような感じがするじゃないか。それから・・・生々しい男、女という表現を陽神陰神おがみ めがみというソフトな表現にかえているのも、それだね」

男二人の検証

祐二は突然声をあげた。「そうか。古事記が日本書紀のダイジェスト版なら、わざわざ、古事記に日本書紀にない。別などという古名と思われるふしぎな地名を併記したりはしないですね」

「そうだね。それはいい着眼点だね。別の真実が何であるにしろ、古事記が後宮向けに再編集されたというなら、まるっきり必要のない表記だね」

「つまり、古事記が、日本書紀より以前に書かれた事をしめしている証拠ですね」

「そういうことだね。さて、次の五の、表記の違いだね。現代表記なら『海月なす漂える』とか、『くらげなすただよえる』とか『クラゲナスタダヨエル』とか色々表記できるのだが、『久羅下那洲多陀用弊流』と表記しなければならぬのは、古事記の編纂時には書き言葉がなかったという事を表していないかな。最初に出来た島『オノゴロシマ』が古事記の表記では、淤能碁呂嶋、日本書紀では？ 馭慮嶋と違っていて、前者は漢字音によるふりがなであるのが、明白であるが、後者は、どうやら固有名詞化しているように思える。これは古事記が作られた時代には日本には文字がなく、中国渡来の漢字音（漢字には定まった一つの音しかないのだ。たとえば春という漢字にはシュンという読みしかなくジユンとは読まない）を用いて、日本語の音を書き留めたのが、日本文の始まりであったことは忘れてはならない事なんだ。古事記にはその残滓があると言うことだね。一方日本書紀は、『クラゲナスタダヨエル』という表現を、漢字の音を用いて表記するのが、劣等国的であることを嫌ってか、この表現そのものは用いられてない。日本書紀では『洲壤浮標譬猶遊魚之浮水上也』（国の土は遊漁の水に浮かぶようである）とこれを表記しているのだが、これは漢語の表現で、和語でいうなら『クニツチノウカブハミズニウカブサカナノタダヨエルゴトシ』と書く

ところだが、やはりこれでは田舎臭いから、すっかり漢文に直されてしまっていると言う事だろうね。明らかに日本書紀は古事記の表現を気にしているというところかな」

その時、看護婦長がコーヒーを二つ入れて、部屋に入ってきた。

「ああ、婦長さんわざわざすみません。忙しいところ気を遣って頂かなくても」と、田沼は言った。

「いいんですよ。私は先生のリゾート病院シリーズの大的愛読者なんですから。ここで、先生の作品が生まれるかと思うと、なだかわくわくしてして、楽しいのですから」

「なんだか、気恥ずかしいな。こんな、憂さ晴らしにファンがつくなんて」

「オホホ、先生が照れているのは意外に可愛いですね。ところで、田沼先生、血液検査の方。大分結果が良いようですよ。よかったですね」

「あ、退院はしばらくご容赦。よく調べてくださいよ。絶対悪いとこはあるはずです。あ、ほら、痛い痛い、体中がぎすぎすする」

「はいはい。先生は病気です、病気です・・・そう言うことにして起きましようね。それではごゆっくり」

祐司は婦長が出て行ってしまうと、言った。

「婦長さん、先生を、見る目がなんだか妖艶でしたよ」

「よせやい。さ、続き続き」田沼は、差し入れのコーヒーをこくりと一口飲んでから、祐司の顔を見つめて言った。

「どうだい、古事記は明らかに、日本書紀よりもずっと古い書だと判断して良くはないかな。そうだ、もう一つ忘れてはならないことがある。日本書紀の引用する神々の誕生に引用する「一書」の中に、古事記と思われるものがあることに気がついたかい？」

「え、そんなのがありましたっけ」

「ああ」

「それは、どれですか？」

男二人の検証 三

「それと、もうひとつ見逃している、重大な事があるよ」

「え！まだありますか」

「あるさ、大ありだ」

「これは、秘密にしておこうかな」

「先生。ご馳走しますから教えてください」

田沼はニヤリと笑って、「えへへ、嘘だよ。教えてあげるよ。ご馳走は鎌倉プリンスホテルのディナーで、できれば懷石料理がいいな。もちろん沙也香君も誘うんだよ」

「ゲ、キツ！」

「ハハハ・冗談だよ冗談！」

「ワ、良かった」

「それじゃ、秘密をばらすか。・・・書紀は古事記と違って、原典となる文書を列挙しているね。それを『一書』として名前を伏せて載せるのだが、その何十もある『一書』の中の一つに『古事記』と思われる『一書』があるのに祐司君は気づいたかな」

「そういえば、似たような文はあるなとチラとは思ったのですが・・・そこまでは」

「ふふん、これは僕が頭が良いと言うことではないんだよ、何とていうか注意力という年の功だろうね。でね、それは日本書紀の巻頭、神代上、第一段にある条なんだ。神々の誕生の条、（田沼は日本書紀を開く）ほら、日本書紀のここ、一書がここでは、六書引用しているけれど、その、二番目の一書が似ていると思うのだ。それをちよつと読んでみようか、『一書に曰く、大昔、国が幼く大地が幼い時、例えば浮かぶ油ごとくに漂った。その時に国の内に物が成立した。その形は葦の芽の発芽したのに似ていた。これによって生まれた神がある。可美葦牙彦舅尊と名乗った。次に国常立尊・・・・』とここまで読んで、田沼は日本書紀をおいて、古事記を取り出した。

「次は、古事記の神々誕生の条を読んでみるね。『国幼くして浮いた油の様であり、クラゲナスタダヨエル時、葦の芽のように生えて生まれた神が宇魔志阿斯訶備比古遲神・・ほら、でた、宇とか阿とか斯とか比はやがて、う、あ、し、ひ、といった同じみのひらがなになんて変わってゆく、ふりがな用漢字だね。日本書紀の、神の名は、現在のわれわれにはふりがなを付けなくては読めないけど、古事記のこの神の名はふりがななしでも読めるというのは、ちょっとした感動だね。なにしろ書紀ですら1300年前の文章だから、古事記の文章はどう考えても1350年前の文章だからね。そのあいだ、読み方が変動しなかったのは驚きだよ・・あれ、ワキ道にそれしてしまったね。つまり僕がいたいのは、古事記は日本書紀において一書扱いになっているのではないかということだね」

二人研究の一応の結論

「古事記が日本書紀にとって一書にすぎなかったとすると、日本書紀中に、古事記に関する記事がなくなるのは当然だね。さてどうやら、古事記というものが、どのようなものであったか、今までの検証でだいぶはつきりして来たようだと思わないか？」

「そうですね、今まで検証したことを総合するといろんな事が見えてきますね」

「それじゃ、まとめてみようか。・・・古事記の文は、日本に文字のない時代があった事を仮名用漢字によって香らせているね。そうした所は日本書紀には見られないな。また、越の国の表記が、書紀にあつて古事記にはないとか、国が生まれた順番が古事記では筑紫の方が近畿より先であるとか、古事記の表現が、近代的なモラルに捕らわれていないおらかさがあるとかを総合すると、古事記序で太安万侶が書いたと自称する、日本書紀よりおよそ10年早いという年紀は、嘘という結論が出せそうだね。それにともなつて、古事記序文と本文のあいだに、矛盾が発生する。つまり序文の最後に書かれている期日と本文の期日が一致しないと言うことだ。この序が太安万侶によつて本当に書かれたならば、太安万侶は嘘を書いていることになるね。そこから推測できることは、古事記の序文と本文は別に書かれて、つなぎ合わされたと言うことだ。このような見えすいた嘘は当時の八世紀初頭の高位な官人であつた太安万侶のできることではなかったと思われるね。太安万侶の不在説であるが、それは続日本紀の中に官位授与の記事があるし、最近では墓が発見されて日付入り墓誌まで出てきたのでそれは否定できる。このことについての事実はずまりこうだつたと思える。・・・西暦にして690年の頃、まず、誰かの手によつて作られた古事記が存在した。それと、多くの史書が参考にされて日本書紀が長い歳月をかけて編纂された。書紀編纂後、参考になつた一書群は抹消・焼却された。

後年、消去をまぬがれた一書である古事記原本に、太安万侶名で他の者が序文を書いて、密かに流布させた。それは「禁書」の制がゆるんだ、そうとう後世の、ひょっとすると1200年の鎌倉時代の事であったかもしれないね」

「太安万侶は、日本書紀完成のあとすぐ、宮中で日本書紀についての最初の講議を行ったと、書紀講議記録である『日本紀私記』に書かれているんですよ」

「ほう、それは知らなかった。それは興味ある事実だね。その『日本紀私記』を読んでみたいな。用意出来るかな」

「そうですね、買うと高いですけど、たしか大学の図書館にありますね。次回はそこからですね」

早川祐司、大学の図書館に行く

翌日、朝から早川祐司は清滝女子大学の図書館で調べ物をしていった。裕福なこの大学の図書館は緑の岡に建てられていて、良く磨かれた広いガラス窓からは生い茂るケヤキや銀杏やメタセコイアなどの大木がテニスグラウンドの前で赤や黄に色づいていて、ゆらりと日射しを浴びているのが見えた。

検索用のパソコンで「日本書紀私記」と入力して出てきた本を、司書の女性に出して貰うと、解説なしの漢字の羅列であった。これではさすがに田沼先生にも手強いであろうし、病気悪化ということにもなりかねない。現代語訳とは行かないまでも、解説つきの本はないかなと検索してみると、吉川弘文館からでている「日本書紀私記書目解題」と、言う本が良さそうである。

祐司は、ぶ厚いその本と「日本書紀私記」を持って学内の自分の研究室にもどった。12月の学園は今、冬休み中で、人の気配がなく、がらんとしている。通り抜けて行く風が、黄色く枯れ残ったモミジや銀杏やらの五万坪の敷地の木々を騒がせて行く。サザンカが所々でクリスマスツリーのように赤い花をびっしりつけている。吹く風に黄葉が一斉に道に降りしきる。

コーヒーを飲もうと、ポットに水を入れて湧かす間、この「日本書紀私記」解題はどのような人が書いているのであるうかと、パソコンを立ち上げて「北川和秀」という人名を入力してみた。

学習院大学卒、国文科助手を経て、群馬県立女子大学の国文科教授になった。とある。これは2008年の時点の記入であるようだ。写真も載っている。まだ40代のように見える人だ。祐司は、その経歴が、あまりに自分に良く似ているので驚いた。だからどういうことではないが、なにか仲間を発見したように思えたのだ。

祐司の研究室は教授の眺めの良い、中庭を見下ろす研究室に比べ、

一階のもみの木の下のくらがりが見えるだけの部屋だが、その緑の裏庭を眺めながらコーヒーを飲むのは悪くない。コーヒーの味が一段と引き立つように思えるのであった。コーヒーを飲みながら祐司は思った。今日は、これからこの本にざっと目を通したあと、田沼先生の所に、この本を届けなければならぬ。田沼先生は詩人であるが、不思議な分析力のある人だと、改めて思った。詩人という人がどのような人か、田沼以外には詩人と呼ばれる人を知らない祐司だが、詩人という人々には何かそのようなまぶしいさがありそうに思えた。田沼は、じみな自分の生活に飛び込んできた輝かしい何かであった。

太安麻呂はどんな人？

祐司が、二冊の本を田沼の病室に持ってきてから、三日目にふたび祐司はやって来た。

「先生どうでした？」

「祐二君に本を渡されてから、急いで読んでみたよ。いろいろ問題があるね。これから勝手な推測を述べるから、なにか疑問点点があったら、口を挟んで良いよ」

「はい。僕も資料をコピーしたりしてだいぶ読み込んできました」

「うむ、それは見上げた心だ。毎日忘年会でそのような閑がないと思っていたよ」

「僕はセンセみたいな飲んべえではありません！見かけよりまじめなんです。そりゃあ、鉄道模型やジオラマといった趣味にだいぶ時間を割いていますが、生活は質素なものなんです」

「僕の若い頃はね・・・まあ、いいか・・・はい、はい勉強、勉強」と、田沼はニヤリと笑った。

「太安万侶がどのような人であったのかは、古事記の自己紹介的な序文以外には日本書紀の後の国史書である続日本紀しよくほんぎにいくらかの記事があるだけだ。まず文武天皇の在位中の慶雲元年きんうんねん（704年）の条に、次のように書かれている。『正六位下の太朝臣安麻侶おほのあそみひとまろに五位下を授けた』。この記事は、他の十五人ほどの人に従五位下を授けたという記事と一緒に特別視されないで、多くの人の一人として書かれている。和銅四年（711年）には、多くの貴族達とともに『正五位下太朝臣安麻呂に正五位上を授けた』とある。元明天皇の在位期である靈龜元年れいきねん（715年）正月には、やはり多くの貴族達と共に昇進げんしんしていて、『正五位上の太朝臣安麻侶に従四位下を授けた』とある。元正天皇の在位期である靈龜二年れいきねん（716年）九月二十三日の条には『従四位下の太朝臣安麻呂を氏長うじのかみに任じた』とある。この氏長というのは何かな、祐司君？」

「大化の改新は朝廷制度の整備を伴っていました。一つの王家が永く続くとありがちなことですが、分家などによって皇子、貴族家が非常に増大して、多くの官位を増やさねばならなくなったのですが・・・ということは、朝廷費用の年ごとの経費の増大を意味するのですが、このままでは早晚、国庫が不足してしまうことは目に見えています。それで、氏を定めて、官吏の増大を防いだわけですね。男子相続制を根として、氏の筆頭をさだめて、一定の家からの官吏登用の増大を押さえれば、各家は、内部で話し合い互助するでしょうから、朝廷全体としては人件費が抑えられるということですね。ここで、あらためて、太安麻呂が氏長に任命されたことが続日本紀に特記されているのは、続日本紀編纂にいかん太氏が深くかわっていたかという事を示す証拠ではないでしょうか」

「なるほど、そういう事なんだね。さすがに、国文科の先生、目の付け所がちがうね」

「先生の弟子とはいえ、一応安給料ながら助教授ですからね、ちょっと良いところも見せないと、出版する本でも、僕がどうしようもない助手みたいに扱われてしまいそうですからね」

「あつはつは。頼りない安給料の助教授として絶対書くよ。きめた！」

祐司は笑いながら、田沼をにらんだ。

太安麻呂はどんな人？ 二

「ここで、さらに僕がだめでないことを強調しなくては、いけませぬね。元正天皇が美濃不破の行宮（仮の宮）に、数日間滞在した時、山に美しい泉を見つけました。そして泉で手や顔を洗ったところ肌がすべすべしたというので、元号を改め養老元年（717年）としました。・・・この時、女帝の天皇は37才、美女と伝わっておりますが、さすがの美女も肌の衰えを感じ始めたときに、この効果抜群の泉の発見はよほど嬉しかったんでしょうね。なんか、ほほえましいエピソードですね。・・・これによってその吉兆を喜び、80才以上の宮人に位を一階くわえるのですが、位上げによって五位以上になるものは除外したのです。何故かという五位よりいわゆる「貴族」と呼ばれる人々に列する事に成っていたからなのです。また五位になれば、位階のみによって碌があたえられるようになるかなのです。これも女帝らしいいけちくささを感じないでもありませんが、ほほえましい一面と言っておきましょう。さて、思い出して欲しいのは704年、太安麻呂は始めて正六位から従五位下という『貴族』と呼ばれる位に達した事です。出生は不明ですが、723年に葬られたという墓碑銘のある墓が近年発見されていますので、当時の寿命から推測しますと60才で亡くなったとすると、貴族に列したのは、なんと当時としては老齢である41才という年であったとおもわれます。もし、亡くなった年が70才であったなら51才であったということです。報われない人生に晩年になって光が差してきたという感じなんです。しかも、その七年後には、さらに、従五位上、正五位下、という位階を二段階も飛び越して正五位上についてしまっています。この背景には、きっと日本書紀編纂の功労が影響しているのではないのでしょうか」

田沼は、この言葉を聞いて、感心したように祐司を見て言った。

「ほう、さすがの助教授。酒浸りの生活ばかりでないことが今、やっと解ったぞ」

「どうだ、酔いどれ詩人まいったか」

「それを言うなら、せめて徘徊詩人と言って欲しいな、アル中とまちがえられるからな。ハハハ。今回は僕の負けだ！その事はすごい良い発見だね。このめざましい昇進が、日本書紀編纂によるものかどうかは、まだ確定できないが、何かの原因がありそうなことは間違いないね」

太安麻呂はどんな人？ 三

「さて太安万侶が氏長になったという716年からの記事のあと、記事がないのだが、のちに、日本書紀を撰上する舍人親王の記事が719年に見える。ちよつとこれは不思議な記事で、家来を36人、年貢をとれる戸を800戸にするから、幼少の皇太子（のちの聖武天皇）を良く守るようにとの詔を出しているのだ、一体これは何だろうな。天皇が舍人親王の権力の増大を恐れているようにとれるね・・・そうして、養老四年（720年）五月二十一日の条に『これより先に一品の舍人親王は勅ちよくを受けて、日本紀の編纂にあたっていたが、このほど、それが完成し記事30巻、系図一卷を奏上した』という文章が現れるのだ。そのあと八月三日の条に、右大臣正二位の藤原不比等（当時強権を誇っていた）が亡くなるという記事がある。元正天皇は、不比等の死をひどく悲しんだようだね。しかし八月四日には早々と、天皇は舍人親王を太政官相当という臨時職を与えて、不比等に変わる、筆頭の役につけている。これから思うに、先の舍人親王への特別の報酬は、不比等が病に臥して、死期が間近い事を知った、天皇の対処だったようだね。養老五年（721年）正月に天皇は文化興隆を目指して、学業を修める者に褒賞を与えているのだが、その中に『従六位・太羊甲おつのかこも許母』の名が見える。位と言い、名前と言い、恐らく太氏の若者ではないだろうか。養老七年（723年）7月7日の条に『民部卿（戸籍筆記などの文書官の長）従四位太朝臣安麻呂が卒した』の記事が見えるね。これは、前にも言ったが、昭和54年に火葬の墓とこの記事に整合する年号が書かれた墓誌が発見されているんだ。これによって、日本書紀の記事が捏造でなくて、かなり詳しい叙述であることが見直されたい。そして神龜元年（724年）じんぎがねん天皇は聖武天皇に譲位するんだ・・・まあ、以上が太安麻呂に関する記事の全てだ。続日本記には日本書紀についての記事はきわめて少ないことが解るね。これでは、日本

書紀と太安麻呂の関係がつかめないどころか、書記の中心執筆者が誰なのかも特定できないのだよ。・・・この考察をさらに深めるためには、宮廷で行われた、日本書紀の講義を記録した日本書紀私記をさぐるよりないのだ。したがって、この後は祐司君の持ってきた、日本書紀私記解題が役にたってくるんだ」

日本書紀私記とはなにか？

結局、その日は「日本書紀私記」にふれずに終わってしまった。

翌日の今日は年末にしては、風のない暖かい日であったから、昼食を終えた田沼はウクレレとイエスタデイのタブ譜を一枚持って、トンビが鳴いている海岸に降りる広い階段の隅で弾いていた。タブ譜は、素人の為の音符である。ウクレレのギターより一弦少ない四つの弦を上からみると、ちょうど楽譜のように見えるが？？？等と縦に記入してあるこれは一弦は第一フレット二弦は第一フレット三弦は第二フレット四弦は第二フレットを押さえよと言うことである。タブ譜にたよれば楽譜を読めない田沼にも曲がひけるのである。田沼のウクレレの先生の近藤氏（クラシックギタリスト）によれば、ポップのギタリストの中には、楽譜が読めず、このタブ譜で仕事をしている人がいるという話だ。

田沼は若かった頃、映画「ドクトル・ジバゴ」を観て感動した。これはロシア革命に翻弄されるロシアの詩人で医者ジバゴの人生を描いた作品だが、その中で、詩人が愛して演奏する楽器として三角ボデイのバラライカが心に残った。詩の創作のあいま、田沼はバラライカならぬギターを楽しんだ。その頃はタブ譜を知らず、楽譜によっていたから、ぼつりぼつりとした演奏であるか、コードによる歌の伴奏であって、自分で暇つぶしにやっているようなものだった。

田沼は、ギターが大きくて、持ち歩きに不便なので、ウクレレに目をつけた。ハワイで「オオタサン」という日系人が、ウクレレの王様として名を成している。CDも買った。まるでギターのような名演奏ではないかと思った。田沼はヤマハのウクレレ教室に入った。田沼はタブ譜を知った。

田沼が、イエスタデイに興じていると、クリニックのほうから、

沙也香と祐司がやってきた。

「先生、ここにいたんですか。毎日の監獄生活にあきて、脱獄したのかと思いましたよ」と祐司が声をかけてきた。

「好きで、ここにいるんだ。巷だつてたちの悪い監獄のようなものであるのを君は知らないな」

「あら、先生、さすが詩人、その言葉ちよつと詩になっていますよ」「そうかい、褒めても何も出ないよ。僕は一茶ばりの貧乏詩人だからね」

三人は田沼の特別室に戻った。

「先生、不自由でしょう、再婚はいかがですか」と、唐突に祐司が言った。

「君ね、詩人は詩を書くから詩人じゃないのだ。芭蕉でも荷風でも一茶でも中でも自由を愛するから詩人なんだよ。奥さんは1回でこりた。あれは幸せな拘束装置であることを、独身である君はもちろん知るまい。僕はこれでいいの。しかし一度はその甘い拘束装置を味わってみるのも良いものだぞ」と言つて含み笑いをして祐司と沙也香を交互に見た。

「沙也香さんは、すでに録音でわかっているだろうけど、古事記の古さと、太安麻侶との関係については一応の検証は済んだのだ。古事記・日本書紀・続日本紀については、おおむね太安麻侶に関する記事は調べ尽くしたというところだね。だから今度は、第二資料として、「日本書紀私記」をあたろうと思うのだ」

日本書紀私記とは何か？ 二

「日本書紀私記について考える前に、舍人親王や太安麻呂以前の書紀成立の背景を押さえておかねばならないと思う。日本書紀の推古天皇28年（620年）の条に『この年皇太子厩戸皇子（聖徳太子）と蘇我馬子大臣は協議して天皇記と国記と臣の連・伴造・国造・百八十の下臣と公民の事を記した本記を録す』とある。この歴史書は蘇我蝦夷・入鹿が滅ぼされる皇極天皇四年（645年）の書紀の条に『蘇我臣蝦夷は誅ころされるところとして、ことごとく天皇記・国記・珍宝を焼く。船史恵尺（韓国からの船によつてもたらされる贈り物、事情などを記す文書官）は急いで、焼かれる国記を取り出して中大兄皇子（後の天智天皇）に提出した』という記事からみると、保存されたようだね。この歴史書の名前を何と云ったか解らないが、古事記の記事が皇極天皇の二代前の推古天皇の条（628年）の『この天皇の陵は、初めに大野の岡にあつたのを、のちに科長（大坂）の大稜おほなりに移した』で、終わっているのは、645年に滅亡した、蘇我氏の手になる歴史書と妙に整合するではないか。・・・でね、極論をいえば、この歴史書の名前は「古事記」であつたかもしれないね。もちろん疑わしい序文を除いた部分なんだが」

祐司と沙也香は、田沼のその推論の鋭さに「ホウ」という顔ををした。

「しかし、ここで留意しなければならないのは天武天皇（在位673年～686年）の時に古事記序文においても、日本書紀においても、歴史書編纂を意図したことが、記載されていることなんだ。古事記においては太安麻呂に命じるのだが、書紀においては太安麻呂の名はなく、『川島皇子・忍壁皇子らに命じて帝紀及び上古の諸事を記し定められた。中臣大島と平群子首は、自ら筆をとつて記録し

た』とあるのだ」

「まあ、これで、古事記・日本書紀・続日本紀から読み取れる、書紀成立に関する情報は尽きていると思う。それを補うために、いよいよ日本書紀私記を検証しよう。まず『日本書紀私記』とは何かということだね。養老四年（720年）に完成した日本書紀は、その後、宮廷内で、理解のための読書会が開かれるようになる。書紀に詳しい教師が、一字一字読みながら、解釈していくというやり方で書紀の内容を把握しようというものだ。この講議の内容を記録したものが、『日本書紀私記』なのだね。この書のなかに、太安麻呂に関する重大な記事が出てくるのだ」

日本書紀私記とは何か？ 三

「続日本紀に目を通して太安麻呂は日本書紀編纂に関与していないとしか読めない。しかし太安麻呂と日本書紀の関係は、日本書紀私記などに見いだすことができるんだ。・・・それは、日本書紀私記を検証した後、示そうと思う。・・・宮廷内の日本書紀の講義の行事（これは数年に及ぶこともあったというね）を記録したものが日本書紀私記であることは前にも言った通りだ。養老四年（720年）にできあがった日本書紀の講義は養老五年（721年）・弘仁三年（812年）・承和十年（843年）・元慶二年（878年）・延喜四年（904年）・承平六年（936年）・康保二年（965年）の七回開催されたい。太安麻呂と関係がある講義は、書紀が完成した翌年に開かれた、養老四年の講義だ。他の講義は、開催されたことが「続日本紀」に、記載されているんだが、この養老四年の講義は全く記録がないのだ。

いつから、始まったのかは不明だが、少なくとも元慶二年（878年）のころからは、終了後に竟宴（やみえん宴会）が催され、書紀に登場する神や人を題として歌が詠まれ『日本紀竟宴和歌』としてまとめられているんだが、この和歌集に『養老五年始講』という部があり、『博□□四位下大江朝臣安麻呂』の名が見える。この名は『博士従四位太朝臣安麻呂』と考えられる。しかし、それ以上の詳しいことは記されていないのだ。『しやくにほんし新日本紀（日本書紀の解釈書）』にも『養老日本私記』などと書かれていることから、太安麻呂が、講師をつとめて、講義を行った可能性が高いと考えられるね。これは91年後に行われた弘仁時の講義の担当博士が太氏の『おのあそんひとなが従五位多朝臣人長』であることが弘仁私記に書かれていることから、日本書紀と太氏の関わりの深さが表れているとみるのだが、どうだろう」

祐司が口をはさんだ。「そうですね、日本書紀成立の翌年に博士

として講義をしているならやはり太安麻呂はやはり日本書紀の作成の立役者と言うところですかね」

「きつと、そうだね」

「そうすると、太安麻呂がなぜ、編纂者として続日本紀に名を書かれていないか不思議ですね」

「うん、不思議だね」

日本書紀私記とはなにか？ 四

「あ、それから、弘私記に序文というものが、あるのだけれど、ここに、日本書紀が舍人親王とともに、太安麻呂が編纂に携わったと書かれているのだ。これらのことを総合して判断すると、古事記は太安麻呂の編纂ではないが、日本書紀編纂には太安麻呂が濃厚に関係していると考えられるのだ。だとすると、続日本紀の太安麻呂に関する沈黙は意図的なものと思わざるをえない・・・この続日本紀の意図とはなんだろうか」

沙也香が小首を傾げながら、言った。

「太安万侶の名前を出すと、なにか、国史の目的を遂行するのに差し支えがあったと言うことなんですかね」

「うーん、その所が解らないとこなんだよ。編纂者としての太安麻呂の名が書紀成立の最初からなかったのか、後年削除されたのかは不明だね。書紀編纂の実務官として、安麻呂は非常に重要な役割を果たしていると思われるのだ。また太安麻呂の子孫と言われる多^{おお}のひとなが人長は90年後、日本書紀の講義を博士として行っているから、日本書紀にも、続日本紀にも太氏の名があつて当然なのだが、ないというのは後年削除された可能性があるね。何らかの不都合に、書紀、続日本紀は断固とした隠蔽を下していることは続日本紀の記事を読めば歴然だよ。続日本紀の和銅元年（708年）の条に『正月十一日武蔵の国秩父郡が精錬を要しない和銅を献じた。これに関し天皇は以下のように詔なされた。』私が治めているこの国の東方にある武蔵の国に、自然に生じた銅が出たと献上された。これは天にあられる神と地におられる神が治世を愛でられ祝福された事によって、現れ出でた宝であると思う。そこで、御世の年号を新しく換えよう」と。そこで、慶雲五年を和銅元年として定める。人々の官位をあげ、大赦を行った。和銅元年一月十一日の夜明け以前の、死罪以下罪の重い軽いに関わりなく、すでに発覚した罪も、まだ発覚しない

罪も、獄につながれている囚人も全て許す。八虐《謀反・綾破壊・親の殺害・大量殺人。寺社に対する不敬など》を犯した者・強盗・窃盗など法律によって恩赦の対象にならないとされたものは、この中に入らない。山沢に逃げ、禁書をしまい隠して、百日経つても自首しないものは、本来のように罰する』とある。・・・この、禁書に近い、不都合にあたることを太安麻呂は、書記編纂において行つたとは考えられないだろうか」

禁書とは何か？

「『禁書』なんて言う記事があるのですか？」と、沙也香が言った。
「そう、日本書紀が提出される、13年前の記事だね」

「禁書とは一体何でしょうね」今度は、祐司が呟いた。

「つまり、書紀は、本文に対して、一書、一書を多数引用して、公正な学術書のようなのだが、そうではない。たとえば古事記の国生みの条では近畿圏は後の方に誕生するんだが、書紀では、引用する一書すべてが近畿圏から生まれるように書かれている。恐らく、これは、原書を書き換えて載せているのだと思う。国生みの順番すらそのように書き換えてしまうのだから、もっと不都合な書については、言及すらせず、所持禁止の書にしまったのだと思う。それが、この、禁書を隠れ持ち・・・の記事から読み取れはしないだろうか？だから、書紀が描くところを百%信用してはならないと思う。日本書紀作成の目的は大和王朝が、神代の昔から神の子孫として、国の支配を許された一族であることを書いて、その正当性を喧伝することなのだ。書紀が成立する700年頃、書紀の引用するところの『一書』が数多く存在していたことは当然推測できる。それが現在に至ると、ほとんどの書物が残されていない。それらの書物が火災などで焼失しただけではなく、積極的な焚書があったに違いないと、僕は思うのだよ。古事記の文書からさえ、日本書紀の嘘がみやぶれるのであるから、古事記も『禁書の一書』であった可能性は高い。日本書紀は多くの一書から記事を引用したあと、それらの書物を捨てたのだ。だから書紀を編纂するという事は、多くの貴重な書を捨てる行為と同義であったと言うことだ。太安麻呂が推測通り、書紀の編纂官であるなら、焚書するのも太安麻呂であったと言うことだね。安麻呂は一書が燃える炎を見ながら何も思わなかっただろうか。きっと、隠蔽される歴史の真実に洩したはずではないだろうか？そうであったことは、これからあとの日本書紀本文の検証で解る気が

するんだ。・・・日本書紀は確固とした、自分の存在目的に、自ら逆らっているような内容を記している、不思議で矛盾のある書物だと僕は前からうすうす思っているのだけど、今こそは、それが何故なのか掘り下げてみよう。・・・はい、今日はここまででおしまい。今度は鎌倉プリンスホテルでディナーという事にしようか。なんだか、ちよつと堅苦しくなつて、僕らしくないからね。お代は祐司君・・・・じゃなくて、僕持ちだ」

祐司と沙也香は、笑顔になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5099y/>

太安万侶《おおのやすまろ》古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病

2011年12月31日06時49分発行